



発祥の地、和歌山マスターズ 結成以来、 40年を振り返る

3月といえば3日のひな祭だ。辞書によると、女の子のある家で、ひな人形を飾って幸福を祈る日、とある。春を呼ぶ奈良東大寺の二月堂修二会、一般には“お水取り”の方が分かりやすいかもしれない。1978（昭和53）年1月14日、和歌山マスターズ陸上の前身、和歌山中・高齢者陸上競技クラブが旗揚げをした。マスターズ陸上の始まりである。同年1月28日には合同練習が始まり、3月には3回目の練習が――。それから今年で40年。日本のマスターズ陸上のルーツを探ってみた。

長寿と健康、ベテランズ陸上

日本にマスターズ陸上が初めて生まれたのは和歌山。いわば和歌山はマスターズ陸上の発祥地。和歌山でマスターズ陸上に情熱を傾けた一人の人物がタネをまいた。現在、日本マスターズ陸上競技連合会長の鴻池清司さんだ。今年80歳。和歌山中・高齢者陸上を結成したときは40歳だった。当時は和歌山市内の中学校教諭で、熱心な指導で優秀な陸上選手を育てていた。

だが、鴻池さんは出場した全日本実業団陸上競技大会の400mH予選で55秒61の自己新、40歳の世界新を出したのを機に、第2回世界マスターズ（当時はベテランズ）陸上へ参加する決意を。会場はスウェーデンのイエーテボリ。初めての遠征とあって、走幅跳で5位入賞したほかは、いい成績は得られなかった。

だが、大会の雰囲気酔ってしまった。往年の名選手も楽しんでいる。たとえば1964年東京五輪で活躍した3000mSCのローランツ（ベルギー）や、円盤投の王者であるオーター（アメリカ）が、かつての実力を披露している。

最も感動したのは93歳のダンカン（スコットランド）が、100mを21秒5で走り、ゴールするヤスタンドの観客が総立ちで歓声、拍手を送った。こ

のシーンが目焼き付いた鴻池さんは「ベテランズ（マスターズ）とは素晴らしい。競技は真剣勝負で競っているものの、終わると互いに健闘をたたえ合っている。言葉は分からなくても、国境を超えた友情の交換だ。実にいいことだ」と、光景に酔いしれた。

それだけではない。会場に“陸上の神様”といわれた日本陸上、いや日本スポーツ界での五輪金メダリスト第1号に輝いた織田幹雄氏が顔を見せられていたのだ。この“陸上の神様”から鴻池さんは声を掛けられた。

鴻池さんからすれば、織田氏は雲の上の人である。光栄に思った。このときの出会いが、日本マスターズ結成の糸に結び付いた、とも言えなくもない。

織田氏がなぜベテランズ陸上を観戦したのか。織田氏の胸の中に「これからの世の中は、この種の競技会が大事なんだ。人類の長寿と共に健康が大切になってくる。走って、跳んで、投げて、健康体にするのにベテランズ陸上はもってこい」の思いがあったのだ。

帰国の機中で機運高まる

スウェーデンのイエーテボリには44カ国約3500人が集まった。うち日本人の選手は32人。このうち後にマスターズの要人となる人たちと、帰国の途についた機中で「マスターズの魅

力」について話し合った。そのうち、誰が提案した訳でもなく「どうだろう。日本でも中・高齢者の陸上をつくってみては」の話になった。さらに「中央ではまとまるまでが大変だから、地方のできるころから始めて、普及していけばいいのでは」の話になって、一応ここで区切りをつけた。

が、である。和歌山から一緒に参加していた遠北明彦さん（当時・52歳／和歌山県土木部次長）が「和歌山でもいいのでは」と。これには鴻池さんも驚かざるを得なかった。「えっ？いくら地方からでも、和歌山で大丈夫か。（私にお鉢が回ってきても）キャリアもないし、成功するはずがない」と思ったのだ。

まずは県内一周マラソン

マスターズ陸上をやるにしても組織が必要だ。その組織づくりには仲間がいる。ただそれだけで思いついた訳ではないが、鴻池さんは「自分も既に不惑の年齢。『40にして惑わず』というではないか。仲間づくりを兼ねて日本一周マラソンをやろう。完走に10年かけて。まずは和歌山県一周だ」と決心した。

「仲間は鴻池を含めて4人」と決めた。選び出す基準は熱心さ、実力、行動力、持続性などを考慮し、次の人たちに白



▲西日本マスターズ100mに出場し13秒台を出した渡川さん(右から2番目の83番)。京都光華短大時代の1962年には400mで初めて1分を切る記録をつくった。西日本マスターズ初出場の1978年は35歳、3児の母になっていた



▲渡川さん。この写真は37歳の時の1980年11月号の誌面に掲載されたもの

羽の矢を立てた。海外マラソンの経験のある宮崎武英(当時・56歳)、渡海宏(同42歳)、全日本クロスカントリーで活躍している山本幹夫(同44歳)の皆さんたちだ。

実行するに当たっては正月休みを中心に、お盆休み、連休を利用。10年がかりの壮大な構想だ。すべて自費で賄い、事故も自己処理という、とんでもない企画でもあった。なお、1人が走っている際に、1人はレンタカーを運転、後の2人は写真撮影ほかの務めを。1日10km前後を3回ずつ走破するというもの。

さいは投げられた。1978(昭和53)年1月1日に出発した。和歌山県下一周300kmを2日半で走り終える計画は成功裡に終わった。沿道では声援を送り励ましてくれる人も多く、県下のマスコミもニュースとして扱ってくれた。

マスターズ結成、普及のための日本一周マラソンの第一歩は成功。高まる機運の中、1月14日の結成につながったのだ。14人の同志が和歌山県体力開発センターに集まり、旗揚げをした。

「20歳の老人、60歳の青年」

本邦初の中・高齢者陸上の団体組織

がここに誕生した。初代会長は住友化工の副社長・渡邊源太郎さんで当時60歳。現在の日本マスターズ陸上連合名誉副会長だ。今なお「現役」でトラックやフィールドに立ち、2017年には100歳のマスターズ・アスリートとして60m走や、砲丸投に精を出した。

合同練習は紀三井寺競技場で。発会式に参加したのは男子40歳以上、女子35歳以上の25人だった。このうち女子は2人。ところがわずか2カ月半の間に50人を超え、女性も10人を上回った。3月の定例合同練習を除くと、和気あいあいの練習風景だった。

渡邊会長も参加しており「昨年の社内駅伝で200mを走ったときは29秒8だったが、今月1月に走ってみると28秒6。定期的に練習すれば年齢に関係なく、タイムは上がるものですね」と、すがすがしい表情。

結局、理事長は鴻池さんに決まり、多忙な身に一層拍車をかけた。定例練習会の立ち会いは当たり前で、マスターズの企画運営から、日本列島一周マラソンの企画まで。マスターズのほか、本職の教師の仕事もある。それは口で言い表せないほどの忙しさだった。それは今も続いている。

和歌山マスターズの当初の合言葉は「20歳の老人、60歳の青年」だ。ちなみに当時の会費は年間1人2,000円だった。

西日本マスターズ開催

マスターズ陸上の普及振興には大会が必要だ、と判断した鴻池さんは和歌山陸協に相談。種々討議した結果「県内だけでなく、普及のため広い範囲から」と西日本大会として、11月5日に紀三井寺競技場で開くことに決まった。

予算はなく、すべて手づくり。マスコミへの呼び掛けから、要項の作成、プログラム等々、大会を開こうとすれば大変な作業だ。だが、会員の皆さん

は弱音を吐かなかった。それほどマスターズ陸上へ懸ける情熱がすごかったのだ。

大会当日は天候に恵まれた。21府県から男女320余人が参加して、熱戦を繰り広げた。顔ぶれを見ると若いときに国内の一線級として活躍した人もいた。65～69歳100、200mには杉本正人さん(山口)と、一木譲さん(福岡)が激突。一木さんは門鉄チームの主力として、4×100mRで戦前から戦後にかけて、昭和11、12、21、22、23年と5回も日本選手権のタイトルを取っている。このとき、一木さんは68歳。

大会の日の100mはデッドヒートで、14秒5の同タイムでゴール。判定の結果、杉本さんに軍配が上がった。200mも杉本さんが勝った。「ここ20年間、一木さんと争ってきて、勝ったのは初めて。うれしい」とご満悦だった。

女子で目を引いたのは100mの渡川孝子さん(徳島)だ。13秒6で他を引き離してゴールした。当年35歳。「15年ぶりのレースなので、13秒台がいいのか、どうか分かりません」。渡川さんは旧姓・林さん。誌面で何度か紹介してきたが、渡川さんは京都光華短大時代の昭和37年に400mで初めて1分を切る、59秒5の日本記録を作った健脚の持ち主だ。

京都光華短大のときに一学年上だった中筋(旧姓・高松)道子さん(大阪)は、砲丸投で10m76をボン。周囲は感心して見とれていたが、元はといえば日本選手権のタイトルを取ったほどのブッターだ。ベストは14m10(1965年)。「13年ぶりの試合だったから……。でも楽しかった」。渡川さんも中筋さんも3児のママだった。

参加者から上がった声は「久しぶりに好きなことをして、すっきりした気分。こういった大会が増えてくれるとありがたい」。第1回大会は盛り上がりを見せて幕。この続きは誌面のスペースを見ながら続けたい。